東亜 一八二号
（一九八二年八月）

現代中国における辛亥革命研究 (1)

武漢シンポジウム印象記

狭間直樹
（京都大学人文科学研究所助教授）

一

北京をとびたったジェット機が武漢の漢口側の飛行場に降りたのは、十月十一日の昼まえだった。辛亥革命七十周年を記念してもたれるシンポジウムの開催地に着いたのである。一九一一年十月十日夜の蜂起が成功し、七十年前のいまごろは、革命家たちが革命政権樹立のために心血をそそいで奔走していたはずだが、いま、その革命を主題とする学術討論会に参加すべくやってきたのだと思えば、やはり感激は一入だった。

湖沼を点綴した機窓からの鳥瞰とはちがい、タラップ上からの景色は空港特有の平板なものだったけれども、雨もようの曇空のせいもあってか、周囲のまばらな木立にも華中らしいうるおいが感じられた。出迎えの列のなかには、章開沅（チャンカイユアン）、唐長孺（タンチャンルー）、胡徳坤（フードオクウン）氏ら、旧知の方がたの顔があった。

空港を出たマイクロバスは漢口の旧租界べりをかすめて漢川を西に越え、長江を南に渡る。とぼしい漢詩の知識から崔顥（ツイハオ）の絶唱がうかんでくる。

晴川　歴々たり　漢陽の樹
芳草　萋々たり　鸚鵡洲（黄鶴楼詩）

大橋のうえから右手上流の鸚鵡洲をさがすが、よくは分らない。左手後方の晴川のあたりは建築中の高層ビル群が見えるばかりである。南のたもとの黄鶴楼跡には、五層楼の再建計画があるとのことだった。

宿舎は、名勝東湖のほとりの東湖賓館だった。入口には解放軍兵士が立番しており、緑におおわれた広大な園内のあちこちに、低い建物群がちらばっている。スタッフもふくめて

二百名をこえる参加者がここに泊りこんでシンポジウムが開催されるのである。南山乙所と名づけられたわれわれの宿舎は一九五〇年創建のもっとも由緒ある施設とかで、郵便局もなかにあった。

園内には銀木犀の残り香がただよっていたが、盛時はさぞかしだっただろうと偲ばれる。湖をへだてて、やたらと厳めしい武漢大学の瓦ぶきの高厦が屹立している。午後、専用の遊覧船で東湖めぐりを楽しんだ。

武漢シンポジウムは、正式には「辛亥革命七十周年記念学術討論会」とよばれ、国家的規模の記念事業の一環をなすものである。全体の準備委員会が葉剣英全国人民代表大会委員長、秘書長は屈武中国国民党革命委員会副主席、配役からとりくみの規模がわかるというものである。われわれはまず北京での諸行事に参加し、そのあと学術討論会に参加すべく武漢にやってきたのである。討論会終了後、外国人研究者はさらに孫中山生家参観旅行にも招待され、まことに至れり尽せりの厚遇を受けた。

北京でのメインエベントは、九日午後の人民大会堂での一万人集会であった。胡耀邦党主席が主演説をおこない、あと屈武氏ら民主党派人士四人の方がたの演説がつづいた。いずれも辛亥革命の意義を高く評価し、当面する中国〝統一〟の課題をうったえるという点で共通していた。

集会に先だって、国家指導者によるいわゆる接見があった。われわれ外国人研究者は〝辛亥老人〟とともに湖南省の間であった。コの字型に三列にならべた椅子に坐って待っているところに、葉剣英、鄧小平、胡耀邦、鄧穎超、華国鋒らの諸氏があらわれ、ゆっくりと内側を一巡するのである。最前列では話したり握手したりする人もあったが、儀式的雰囲気がつよかった。葉氏に介添があった以外、指導者たちはみな元気そうに見うけられた。

われわれが参加したもう一つの重要行事に、十日午前、人民大会堂の宴会場でもよおされた、鄧穎超女史の主催にかかる茶話会がある。茶菓、果物などを満載したテーブルが百あまりもならび、十数人づつがそれをかこむ。われわれの席には、ホスト役として鍾恵瀾、余縄武、王剛氏がおられた。社会科学院外事局副局長の王氏、近代史研究所副所長の余氏は日本の研究者の多くと旧知の方がただったが、鍾氏はまったく初めての方だった。氏はたいそうえらいお医者さんとのことで、途中、かの馬海徳医師が横にきてかなり喋りこまれた。遠くで孫文、蔡元培、柳亜子、黄興、馮玉祥、李烈鈞、宮崎滔天らの子孫、縁者の演説があるのだが、どうしてもテーブルの話が主になる。軍服姿の馮玉祥の娘なる方の玲瓏たる音吐はいまも耳にのこっているが、日本語の話をふくめて中味はすっかり忘れてしまった。この会では、社会

科学院副局長の王光美女史が王玉璞、姜漢章氏の案内でまわってこられたこと、退場の途中で張国維氏が溥傑氏を目敏とくみつけて紹介してくださったことが、つよく印象にのこっている。張、王、姜氏のお世話になった研究者はかなり多いはずである。

北京ではほかに、新装なった近代史研究所のお披露目の茶話会、宋慶齢名誉国家主席故居や孫中山逝世宅（鉄獅子胡同）の参観など語るべきことは多いが、いまは省略にしたがう。

記念事業全体からすれば、九日の大集会がいうまでもなく最重要の行事だったが、研究者の関心はやはり武漢シンポジウムにあった。会議は十月十二日から四日間、中国語を公用語に「辛亥革命期の中国資産階級」を主題にして開催された。配布名簿によれば、会議参加者は、中国人百三十四名、外国人四十四名。通訳その他のスタッフは詳らかでないが、相当数にのぼったことはたしかである。外国人の内訳は、アメリカ十四、香港四、カナダ三、北朝鮮・タイ・フランス・オーストラリア各二、インド・イギリス・ルーマニア各一名、日本人は十二名で、石田米子（岡山大学）、衛藤藩吉（東京大学）、小野信爾（花園大学）、久保田文次（日本女子大学）、田中正俊（東京大学）、中村義（東京学芸大学）、野沢豊（東京都立大学）、坂野正高（国際基督教大学）、藤井昇三（電気通信大学）、松本英紀（立命館大学）、山根幸夫（東京女子大学）の諸氏とわたしである。

二十年前の一九六一年に、やはり武漢で、約百名の国内研究者が参加して辛亥革命五十周年記念のシンポジウムが開かれたことがあった。そのときには統一テーマはなかったようだが、そこでの、国民党正統史観を払拭した新中国の研究成果は『辛亥革命五十周年記念論文集』（中華書局一九六二年）としてひろく世界にしめされた。それから〝文革十年の空白〟をはさむ二十年をへだてたわけだが、中国の研究の現状はどうなのか。しかも今度は国際学会として開かれるのだから、いままで論文しか知らなかった多くの研究者と直接に話しあえるのである。辛亥革命研究は、中国近代史研究のうちで内外ともっとも蓄積の多い分野のひとつだから、国際会議開催の意義はだれしもの認めるところであろうが、くわえて〝祖国統一〟を射程にいれた人事交流というてんでも、孫文の指導した辛亥革命の記念学会ほど恰好のものは、他にもとめられないだろう。台湾省の研究者の参加は、けっきょく実現しなかったけれども、参加者が各人各様の期待に胸をふくらませるなかで、会議ははじまったのである。

二

シンポジウムの会場には、賓館内の大講堂があてられた。多くの重要会議がおこなわれたであろうその講堂は、われわ

れの宿舎からバスで五分あまりのところにあった。日程は、十二日午前が開会式、午後が全体会議、十三日午前午後と十四日午前が分科会、十四日午後と十五日午前が革命関係遺跡等の参観、十五日午後が閉会式である。夜も、招待会（簡単な宴会）と映画会、歌と踊り、宴会、と連日スケジュールがくまれていた。招待会や宴会は他国の研究者と知りあう絶好の場だったし、映画は『辛亥風雲』と題する編集ものの記録映画で、いかにも組織委員会の気くばりを感じさせるものであった。

開会式はいわば型どおりであった。湖北省社会科学連合会主席の密加凡氏が司会をつとめ、劉大年、屈武、梅益、韓寧夫、鄭天挺氏の挨拶があった。梅、韓、鄭三氏はそれぞれ、中国社会科学院、湖北省、中国史学会を代表しての挨拶である。そのあと外国人の挨拶があったが、日本からは三人ということで、坂野、山根、小野氏が簡単に祝意を表された。ちなみに、この日きわめて元気に挨拶された鄭天挺氏がわずか両月後の十二月二十日に逝去された。招待会の席で陳慶華氏に紹介されて話をうかがったときも健康そのものとお見うけしたので、あまりに急な訃報に心から驚いたが、ここにつつしんでご冥福を祈らせていただきたい。

午後の全体会議では、周谷城、汪敬虞、張国輝、黎澍、胡繩、劉大年、陳在正の七氏の発表が予定されていた。しかし、周氏は健康の都合で欠席され、劉氏は時間の関係で発表を辞退された。会議には三時間とってあったので、一人二十分の枠内ならたっぷりと余裕があるはずなのだが、倍以上も話す人もあり、後のことを考えて、運営責任者の劉氏の辞退となったのである。

全体会議だから、当然といえば当然だが、各報告はシンポジウムの主題に肉づけと方向性をあたえるべく配されたものとみうけられた。汪氏の「中国資産階級誕生の若干の問題」は、半植民地化の進行とともに、旧来の行業のあるものは衰亡し、あるものは適応的に発展するさまを海運業、銭荘業等において具体的に分析し、買弁資本から民族資本への道もあることを強調したものである。張氏の「辛亥革命前の中国資本主義の発展」は題名どおりのもの。黎氏の「辛亥革命のいくつかの問題についての再認識」は、立憲派の革命への傾斜と共和擁護、君主制打倒という点に革命の勝利を見るべし等の論点をうちだす。胡氏の「辛亥革命における反帝と民主と工業化の問題」は、反清こそ当時の反帝であったことと、下層大衆の発動に革命派の民主を見るべきこと、工業化の目的を達成できなかったが、それが革命によってしか実現できないとの思想が革命派によって提起されたこと等を論ずる。陳氏の「台湾と辛亥革命」は、下関条約による割譲後の台湾と大陸の〝一体性〟を述べ、辛亥革命の影響による〝駆日復

台〟闘争の展開におよぶものであった。

分科会は毎回五小組、計十五が設けられた。提出論文は中国人八十二篇、外国人二十八篇、その内容に照らしてつぎのようなテーマがたてられた。「辛亥革命の性質と意義」「辛亥革命と資産階級」「辛亥革命における工商業団体の役割」は主題をいくらかいいかえた一般的なもの、「光復会、華興会と同盟会の関係」「南京臨時政府と各省軍政府」「立憲派と立憲運動」「辛亥革命と農民」「革命党と会党の関係」は、諸階級ないし各派間の関係、役割の問題であり、「帝国主義の対華政策」「辛亥革命期における清政府の活動」は、革命の対象の問題である。人物をとりあげたものとしては「孫中山研究」「孫中山の民族主義思想研究」「宋教仁研究」「秦力山、黎元洪、張謇等人物の研究」があり、「辛亥革命期の反封建思想」というのもたてられていた。これを見るだけで、たとえば五十周年のときとくらべて、ブルジョアジーないし立憲派の研究に重心がかかっていることがうかがえた。

各分科会には二〜六篇の論文の発表がわりふられた。外国人はほとんど全部、二十三人が発表の機会をあたえられたのにたいし、中国人は三十三名（全体会議をのぞく）が発表した。中国人のばあい、応募論文二百余篇が、章開沅、陳慶華、林増平、汪敬虞、張豈之、湯志鈞氏らの選考委員が半分以下にしぼり、そのまた半分以下にしか発表の機会があたえられなかったわけである。会期の延長は諸般影響するところ大にすぎようが、分科会をふやすことによって解決できなかったものだろうか。

わたしの報告（『中国研究月報』四〇九号参照）は、十二日午後の「立憲派と立憲運動」の分科会（李時岳議長）にわりふられた。林増平、王来棣、耿雲志、M・バスティド＝ブルギエール（フランス）、J・フインチャー（オーストラリア）の諸氏と一緒で、もっとも発表者の多い分科会であった。時間は三時間だから、報告者が十五分の制限をまもれば十分のはずだが、なかなかそうもいかず、討議の時間は少なかった。出席者は約七十人、発言は活発だったが、質議の応酬よりはむしろ自説の開陳といった感じのものが多かった。たとえば、陳慶華氏が、林氏らの観点をさらに発展させる形で、立憲派と革命派とのあいだに本質的な区別を設けるべきでない、と具体的史実をあげながら問題提起をされたことにたいしても、十分な議論の展開はみられなかった。わたしの発表にたいしては、会場ではだれからも意見はきけなかった。

自分の発表のないときは、どれに出てもよかった。論文は、ごく一部をのぞいて十一日の夜に配布されたのだが、なにかと忙がしく、ほとんど読む暇がなかったため、発表者の名前とテーマで決めるしかない。同じ時間帯に五つの分科会

が並ぶのだから、迷わざるをえない。なかには、発言をするや疾風のように隣の部屋へとはせ参ずるということで有名になった方もおられたが、もちろんだれにでも出来ることではない。わたしが出たのは、結局、十二日午前、「辛亥革命の性質と意義」（戴逸議長）、十三日午前、「辛亥革命と農民」（胡繩武議長）の二つである。前者は出席者約六十人、しょっぱなの分科会だったからなんとなく緊張しているあいだに終ってしまった。後者は出席者二十数名と少人数で、議長の議事進行への配慮もあって比較的よくまとまっていたとおもう。報告者は、呉雁南、久保田文次、李侃、中村義の四氏。討議では、たとえば何炳棣氏が、農民問題を考えるうえで中国近代を通した人口、生産、生活諸方面の数量的把握の必要性について問題を提起すれば、それをうけて陳志譲氏が具体的諸関係を等閑に附した〝一般的農民〟像の無内容について語るというぐあいである。そのようであったので、わたしも冷汗をかきながら二三の問題について意見をのべてみたが、なんでも経験で、やってみて度胸がついたような気がした。

出席しなかった分科会については、出席した友人から情報を得るのは当然として、それとはべつに、このときにはまったく思いもつかなかったニュースソースがあった。組織委員会秘書処の編印にかかる『簡報』がそれである。『簡報』は四～六頁建、会期中の四日間に十七号まで出された。開会式、十五分科会、閉会式をそれぞれ報じたものである。（全体会議は第一号に報告者と論文名だけが載った。）これをはじめに受けとったときは、ほんとうに驚いた。昨日、あるいは今朝の会議の模様が千～二千字にまとめて活版印刷されているのである。あとで気付いたが、会場には記録専門の複数の書記が配置されていた。しかし、記録を文章化し、印刷品にしあげるのは、また大変な仕事のはずである。われわれに便利であればあるだけ、秘書処の方がたの苦労がしのばれるのである。それかあらぬか、事務局の王玉璞、姜漢章氏らは連日睡眠二、三時間とのことで、口辺に直径二センチはあるアクチをつくるなど、完全に疲労の極と見うけられた。

史跡等の見学については、書きたいことは多いが、二、三を記すにとどめよう。一つは、修復された起義門である。武昌の城壁はほとんど撤去されていたが、起義門、もとの中和門はきれいに補修されて残されていた。門上から江辺の総督衙門跡のあたりを眺めると、そこは造船所になっているとかで、殺風景なクレーンなんかがならんでいた。その二は、武昌首義革命記念館である。もとの湖北諮議局で、蜂起成功後に湖北軍政府がおかれたこの歴史的建造物も史跡として保存されている。そこでは記念展覧が開かれていたが、その内容の豊富なことは驚くばかりであった。初めてのものがあまりに多いので、つぎの予定の新華書店行を断わってみていたと

ころ、案内役の張銘理女史（張難先の孫娘）との話から覃振（宋教仁、胡瑛と並ぶ桃源三傑）の息女覃鉞女史の知遇をえたのは嬉しかった。第三は、新修なった堂々たる「辛亥革命武昌首義紀念碑」である。シンポジウムに合わせて完成されたそうだが、修復、保存、新建といろいろな形で辛亥革命史跡が人びとの生活にとけこんでいる様は、やはり本国、原地なればこその感を深くさせられた。

最後の閉会式は比較的短時間でおわった。中国人参加論文だけをとりあげたものだが、シンポジウムにたいする章開沅氏の総評は、前掲『中国研究月報』四〇九号に訳文が収められているので参照されたい。外国人参加者を代表した形での任以都女史の挨拶はなかなか意を尽したものだった。一部の論文配布の遅れ等、いくらかの瑕疵がなかったわけではないが、参加者の意見をきこうとする主催者側の姿勢はだれしもの認めるところであり、中国歴史学界初の国際シンポジウムは成功しておわったとおもう。

三

シンポジウムの参加論文を読んだのは帰国後のことであるが、ここで中国人の論文を通してみた二、三の問題について、わたしなりの感想をのべてみよう。外国人のものは訳文の問題などもあり、論文集刊行のために、昨年末を締切として再度、定稿の提出をもとめられたので、それを待つことにしたい。

全体的にいって、さすがに本国の研究は豊富な資料を駆使したすぐれた個別研究が多く、教えられるところ多大であった。論題としては、会議の主題からして当然といえば当然のことながら、ブルジョアジーないし立憲派をあつかったものが多かった。幕の内弁当のようになんでも少しづつというわけにもいかないが、とりわけ新軍をテーマとするものが一つもなかったことは、辛亥革命のシンポジウムとしては、重要なものが欠落しているとの感をうける。ただ、章開沅「辛亥革命史研究の三十年」がいう、かつてあったブルジョアジーについての研究を圧迫するような〝左〟偏向、を是正し、自由な研究を確立をするための一段階として、この現象も理解されるのかもしれない。マルクスをもちだすまでもなく、止揚されるべき対象の研究はむしろ必要なのだから、今後とも研究の自由は保障されるべきである。

まず、ブルジョアジーの問題からとりあげよう。章開沅「辛亥革命と江浙資産階級」は、上海を中心とする江浙地方のブルジョア的発展、その社会的力量と政治的活動について解明する。丁日初「辛亥革命前の上海資本家階級」、皮明休「武漢首義中の武漢商会、商団」、邱捷「広東商人と辛亥革命」も、上海、武漢、広州についての具体的研究で、革命に

はたしたブルジョアジーの役割を詳細にえがいている。

各論文はいずれも、日清戦争後における民族資本主義の発展の結果として、辛亥革命を説明する。民族資産階級は、官僚買弁資産階級とともに中国ブルジョアジーの二つの構成部分とされるものだが、それら相互の関係、およびそれらと近代中国経済の中枢的部分をにぎる外国資本との関係についてはあまり触れられることがない。それら総体の発展としての中国の資本主義化、すなわち世界市場への半植民地的包摂の進行の観点からすれば、民族資本主義の発展はその一部分にすぎないのだから（といって民族資本主義発展の重要性を否定するのではない）、全体像のなかへの位置づけがあってほしいのである。

また、民族資本主義の発展は工鉱業、運輸業等、いわゆる産業資本分野での中国人企業の発展として提示され、同時にいずれの都市でもその階級的動向を左右したのは商業、金融ブルジョアジーであったことが指摘されている。商業金融資本の圧倒的優勢は、世界市場にたいする中国市場の従属性の端的な一表現であり、辛亥革命の特性を規定するものであるはずである。話を飛躍させれば、商業、金融資本の優越は世界市場に包摂された農民問題の重要性、中国人民解放闘争における主力軍としての農民の歴史的地位の反映でもあるはずなのである。

全体としての中国資本主義を、資本の機能からみれば、産業資本、商業、金融資本と分けることができ、それを〝国籍〟の角度からみれば、外国資本と中国資本に分けることができる。そして中国資本は帝国主義、国家権力との距離でさらに買弁資本、官僚資本と民族資本に分類される。多くの論者は、この民族ブルジョアジーを、さらに上層と中下層とに分け、後者を辛亥革命期の革命派の立脚基盤とするようだが、それを主題に論じたのが段雲章「資産階級革命派の階級的基礎に関する若干の検討」である。段論文は、革命派が中国民族資産階級と華僑資産階級の中下層および小資産階級の代表であるという。（華僑については、孔立らの「華僑と辛亥革命」がそれと補完しあう。）これは整合的にみえるシェーマである。しかし、それが整合的なのは、権力からの距離における相関関係をある程度反映しているというかぎりにおいてにすぎない。革命派が追求したのは中国ブルジョアジー全体の利益（かれらの言葉では国民全体の利益）だったのであって、けっして民族ブルジョアジー中下層の利益ではなかったからである。イデオロギーの階級的基盤をもとめることに異論はないが、時代思潮の主流ともいうべき革命派のそれを、とりわけ未成熟な中国民族ブルジョアジーの一部に限定して対応させることには賛成できない。革命派は立憲派とともに中国ブルジョアジーの利益を代表し、前者が急進派＝

左派として革命の道をあゆんだのにたいし、後者は穏健派＝右派として改良の道をすすんだのである。

主題からいって当然のことかもしれないが、立憲派についての論文がかなり多かったことも今回のシンポジウムの特色である。耿雲志「清末立憲派と諮議局」、何玉疇「立憲派と粤漢鉄道権益の回収自営闘争」はそれぞれ題目の問題について、清朝支配者と立憲派の矛盾の深化を解明する。林増平「辛亥革命期の立憲派を評す」は、立憲派のそのような反清朝への傾斜が革命に追随し、連合しての反清闘争へと流れこんでいくとし、革命派と立憲派との関係を「対立――連合――分裂」のシェーマに総括する。そのさい、連合をもたらす主動因は革命派の闘争であるとの観点は堅持されているが、そこに従来の立憲派＝反革命との全否定的評価への反案が意図されていることは明かである。改良主義がかならずしも革命の敵にあらざることを歴史学の分野から主張しているのである。

革命への傾斜のいきつくところ、立憲派人士で同盟会員になるものもあった。他のいくつかの論文もとりあげているが、顕著な例は、呉乾兌「上海光復と滬軍都督府」もいう沈縵雲である。立憲派人士が革命派に転化することは、個人の思想の問題として重要であるが、両派の区別を解消するものではなく、革命情勢の高揚の一表現とみるべきである。

また従来、立憲派の両面派的対応の典型とみられてきた湯化竜が、両面派的にではなく、反清の立場から湖北軍政府を支持したことは、楊天石・王学庄「湯化竜密電の訛りなるを弁ず」が明かにした。湯が武昌蜂起後に、おもてでは革命を擁護するかに振るまいながら、うらでは清朝旧官僚と連名で清軍の南下による革命鎮圧を北京政府に要請する密電を発していたとする資料が誤りであることを、第一次資料を駆使して鋭利に論証したのである。一般に〝あった〟ことの証明よりも〝なかった〟ことの証明の方が難かしいとされるが、楊王論文の考証はきわめて緻密で、すぐれたものである。わたしもかつて、連名密電に依拠して立憲派＝反革命と主張する文章を書いたが（大修館版『講座現代中国Ⅱ』所収「辛亥革命」）、このてんは訂正せねばならない。

いくつかの論文がいうように、立憲派の急進的部分が武昌蜂起前に反清の立場に移行していたこと、そのことによって光復がより容易に実現できたこと、これには異論はない。さらに、立憲派が各地で推しすすめた平和的独立が清朝政権の孤立をいっそう促進したことも、王来棣「立憲派の〝和平独立〟と辛亥革命」が省のレベルで、李茂高・廖志豪「江蘇光復と程徳全」が県レベルで検討しているとおりであろう。平和的独立を〝ニセ〟の独立と全面否定するのではなく、その積極面もみなければならないというのである。たしかに歴

史分析において〝ニセ〟と評価することはたいていのばあい、あまり意味はない。ある立場からして〝ニセ〟であったとしても、そのもの自体の立場からすればまず〝真〟だからである。ほんらい改良主義者である立憲派が革命情勢の急進と権力側のいっそうの反革命的対応とによる矛盾の激化の渦中にあって、いかなる対応をしめすかは、それぞれの置かれた条件によって規定される。ゆえに、関捷「辛亥革命時期の資産階級革命派の遼寧における闘争」がいうように、革命的条件のよわかった東北では、反革命的対応となってあらわれるのである。そのさい、立憲派に集中的に体現された支配階級に共通する対応の原則は、李侃「江蘇湖北両省の若干の州県の光復から辛亥革命の勝利と失敗を看る」も指摘するように、旧来の在地の支配体制をくずさぬことであり、その結果は胡繩武・金冲及「南京臨時政府の終焉から第二革命まで」などのいう袁世凱への〝もたれかかり〟であった。

このように見てきて注目すべきは、趙矢元「第二革命と辛亥革命を論ず」が提起する、武昌蜂起から第二革命までを一つのまとまった時期としてとらえよ、との意見である。そうみることにより、帝国主義、封建主義と人民大衆との基本的対立の中間に登場してきた中国ブルジョアジーの階級的位置がより明確になると思われる。つまり、その左派がつねに人民大衆の側に傾斜し、右派が反動支配の補完物としてしか存在しえないという関係を、辛亥革命の段階ににおいて把握しやすくなると思うのである。革命の成果としての一年有余の共和国時代に、従来の革命派、立憲派の分裂、融合また新生力量の登場など、局面は大きく変化するが、その結果はやはり新しい時代におけるブルジョアジーの左右二派への再編成に帰着するだろう。

革命の直接の対象とされた清朝をあつかうものはすくなく、李文海「清政府の〝預備立憲〟を論ず」、彭雨新「辛亥革命前夜における清王朝財政の崩壊」があるだけである。半植民地化された社会経済基盤に国家の支配体制を適応させようとして失敗した清朝のありかたを、李論文は政体改革の面でのこころみについて整理し、彭論文は財政膨張から全面的崩壊にいたる過程について具体的に論述する。急激な収奪の増大が〝協餉（富裕な省から貧瘦の省への補塡）〟を不可能にし、中央集権を財政面からほりくずしてしまったてんの解明は、民国時代の軍閥割拠体制への展望をあたえてくれる。間接の対象（といっても当時の革命派が敵として攻撃したわけではないが）であった帝国主義については、余縄武「沙俄と辛亥革命」、兪辛焞・李埰畛「辛亥革命時期の日本の対華政策」、卿斯美「辛亥革命時期の列強の対華政策初探」がある。余論文はロシアがこのときもっとも多くの掠奪をおこなったと主張し、兪李論文は列強間の矛盾がそれぞれ異な

る対応をうみながら、自国権益拡大という大目的で一致していたことを、日本を軸に述べる。卿論文は列強の対華政策をその経済的基盤とかかわらせて論じようとした意欲作である。

農民を主題にすえて正面からあつかったものは、呉雁南「辛亥革命と農民問題」である。呉論文は、ブルジョア〝民主派〟の本来的な同盟者である農民がブルジョア革命の潮流にまきこまれ、革命派の指導をうけいれることにより「自覚的な民主運動」にたちあがったことを解明する。また、破産農民を主体とする会党（反体制的秘密結社）については、蔡少卿「辛亥革命と会党の関係を論ず」、魏建猷「辛亥革命時期における会党運動の新発展」、隗瀛濤・何一民「同盟会と四川会党を論ず」がある。前二者が全国的にあつかい、後者が四川にかぎっているとのちがいはあるが、革命にはたした会党の役割を具体的史実に即してたかく評価するてんは同じである。三者ともブルジョアジーと農民の同盟が会党を通じて実現され、そのさい会党による革命派の綱領の受容を同盟関係成立の指標とみることでは共通している。

以上、シンポジウムの主題「辛亥革命期の中国資産階級」に即しつつ、階級配置の問題にしぼって、印象記風の批評的紹介をおこなってきた。孫文ないし革命派にほとんどふれなかったのは、別にとりあげたいからである。また、ほかに取りあげるべき論文は当然たくさんあるのだが、割愛にしたがう。ただ、文化思想方面にまったく言及しなかったので、一つだけ代表的に、唐文権「辛亥革命前の章太炎の仏学思想」をあげておきたい。唐論文は、複雑な章太炎の思想を仏学思想を軸に分析したすぐれた政治思想研究であって、啓発されるところ大であった。

内容豊富な諸論文の一部を断章取義的にとりあげたことにより、執筆者各位の文意を曲げてしまったことをおそれるし、さらに誤解にもとずく行論をしてはいないかといっそうおそれるが、もしそのような誤りがあれば、大方の寛恕とともに忌憚ない指摘をお願いしたい。

＊　＊　＊

昨年、中国では、七十周年を期して多数の辛亥革命関係の書物が刊行された。四人組打倒後、一九七七年いらいのものを数えれば、研究書、資料集等すべてを合わせて百点にものぼるだろう。それらはいずれも、まず第一に辛亥革命研究にとって重要な意義をもつものであり、第二に現代中国の学術界の思想状況の一反映としての意義をもつものである。この大量の貴重な文献について、あらましの見渡しをつける必要はだれしもの感ずるところだろうが、個人でするにはいささか無理がすぎる。そこで、武漢シンポジウムに参加した石田米子、小野信爾、松本英紀氏、おなじく昨秋の東京シンポジ

ウムの報告者清水稔氏、および京都大学人文科学研究所共同研究報告『辛亥革命の研究』（筑摩書房一九七八年）の執筆者のなかの若い二人、河田悌一、森時彦氏と分担協力して、主として研究的意義について紹介することにした。武漢シンポジウムは、文革後において再開された辛亥革命研究のいわば象徴的事業でもあったので、まず序論的に第一回に配し、以下、通史、地域史、人物研究、資料集、回憶録等にわけてそれぞれに述べていきたいとおもう。

☆

☆

☆

CHINA WATCHING 1980

華国鋒 VS. 鄧小平

≪対立の軌跡≫

戸張東夫著

近く開かれる党中央委員会総会で華国鋒党主席が辞任し，〝毛以後〟の一つの時代が終焉する。華主席辞任に至る華・鄧の対立の全過程を克明に追い，「四人組裁判」の展開も含めた最新中国情報。『東亜』連載をここに集約。

四六判 / 1,800円

新泉社 東京都文京区本郷2—15—20 電話 (03) 812—1662